

令和元年5月30日現在

機関番号：12601

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K16693

研究課題名(和文)『サマンタパーサーディカー』研究の基盤形成 諸版対照ツールと註釈対象語索引の提示

研究課題名(英文) Preliminary Research on the Text Encoding of the Samantapasadika within TEI P5 Guideline

研究代表者

青野 道彦 (Aono, Michihiko)

東京大学・大学院人文社会系研究科(文学部)・助教

研究者番号：10773567

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は『ヴィナヤピタカ』という戒律聖典の註釈書『サマンタパーサーディカー』の研究基盤を整備することを目的としている。スリランカや東南アジアの諸地域で伝承される上座部仏教では、信仰・教義と共に行動規範である戒律が重要な意味を持ち、その戒律を理解する上で不可欠な資料が『ヴィナヤピタカ』及び『サマンタパーサーディカー』である。『ヴィナヤピタカ』については研究の進展が著しいが、『サマンタパーサーディカー』については更なる研究が俟たれる。そこで、本研究は『サマンタパーサーディカー』の研究基盤を整備するために、人文情報学的アプローチからそのテキストを巡る諸問題の解決を試みた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

人文系資料の研究は、過去を掘り下げ、異文化を読み解くことを通して、自文化を照らし出すことを主たる目的としている。『ヴィナヤピタカ』及び『サマンタパーサーディカー』の研究もこのような目的を有しており、南アジア・東南アジアの仏教というフィルターを通して自文化を相対化して捉えることを目標としている。その基礎となるのが考察対象を正確に理解することであり、そのために本研究は『サマンタパーサーディカー』のテキストに関わる諸問題の解決を試み、研究基盤の整備に努めた。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this project is to advance the research base of the Samantapasadika, the commentary on the Vinayapitaka. In the Theravada Buddhism handed down in Sri Lanka and Southeast Asia, the vinaya, codes of ethics, plays an important role as much as faith and doctrines. The main resources to understand the vinaya are the Vinayapitaka and the Samantapasadika. Although research on the Vinayapitaka has made significant progress, further research is necessary on the Samantapasadika. Thus, in order to establish the research base of the Samantapasadika, this project tried Digital Humanities approach to solve various problems concerning the text of the Samantapasadika.

研究分野：人文学

キーワード：TEI P5 Guideline Digital Humanities Samantapasadika Vinayapitaka apubbapadavannana 上座部仏教 人文情報学

様式 C-19、F-19-1、Z-19、CK-19（共通）

1. 研究開始当初の背景

本研究が考察対象とする『サマンタパーサーディカー』は、上座部仏教の僧侶達の生活を規定した戒律聖典『ヴィナヤピタカ』（律蔵）の註釈書である。5世紀初めにスリランカにおいてブッダゴーサが制作したテキストであり、パーリ語という印欧語に属する聖典言語で書かれている。註釈は逐語的であり、『ヴィナヤピタカ』の語句を冒頭箇所から順を追って引用し、その内容を詳細に解説していく。その解説は『ヴィナヤピタカ』を厳密に理解し、上座部仏教の出家社会の構造を把握する上で不可欠である。しかし、『サマンタパーサーディカー』の研究は長い歴史をもつものの、遅々として進んでいない。日本のインド学の礎を築いた高楠順次郎が1896年に先鞭をつけて以来、百年を超える年月を経ているにもかかわらず、これまでの『サマンタパーサーディカー』研究は断片的なものにとどまっている。その主たる原因は Pali Text Society (PTS) 版で 1412 頁に上る分量の膨大さにあるが、それ以外に信頼できる版本がないこと、及び、原典『ヴィナヤピタカ』の初出語句のみを註釈する特殊規則 (apubbapadavaṇṇanā) も研究を難しくしている。その研究の難点を少しでも減らすことが必要であり、且つ現実的に可能であると考え、本研究を開始した次第である。

2. 研究の目的

本研究は、上座部仏教の僧侶達の生活規定をより厳密に理解するための方途として、『ヴィナヤピタカ』の註釈書である『サマンタパーサーディカー』の研究基盤を整備することを目指している。前述の通り、『サマンタパーサーディカー』は、『ヴィナヤピタカ』の語句を正確に理解し、上座部仏教の出家社会の構造を把握する上で不可欠な資料であるが、分量が多いとともに、信頼できる版本がなく、特殊な註釈規則が採用されている。そのため、テキストへのアプローチが容易ではないところがある。本研究は、このような難点を人文情報学 (Digital Humanities) の研究手法を用いてテキストを構造化することで解消できると考え、『サマンタパーサーディカー』への効率的なアプローチを可能とするための方法を模索しつつ、テキストを構造化することを目指す。

3. 研究の方法

『サマンタパーサーディカー』への効率的なアプローチを可能にするためには、①諸版本の対照テキストを作成すること（諸版本の異読参照の簡便化）、②註釈対象語句のインデックスを作成すること（初出語句の註釈参照の簡便化）の二つが必要となる。この二つは、デジタルテキストの構造化という一つの作業により成し遂げることができるものであり、具体的には、『サマンタパーサーディカー』のデジタルテキストを、XML (Extensible Markup Language) を用いて、人文学資料をコード化するための国際基準である TEI (Text Encoding Initiative) P5 ガイドラインに準拠して、マークアップすることで実現することが可能である。ただし、TEI P5 ガイドラインのタグ・セットは、西洋の典籍を基礎に作られているため、そのままではパーリ語註釈文献には適用できない。そこで、パーリ語註釈文献に相応しいマークアップ方法を模索することが必要となる。

4. 研究成果

(1) 註釈対象語句索引を作成するためのマークアップについて

TEI P5 ガイドラインのマークアップ方法はそのままではパーリ語註釈文献に適用できないため、本研究では新たなマークアップ方法を模索した。そして、最終的に、<note>というタグを用いて、@type という属性を付して厳密化すると共に、<quote>を用いて、原典からの引用箇所をマークアップし、その枠内において註釈対象語句を更にマークアップする方法を採用した。以下に、マークアップの具体例を示す。

図 1 註釈対象語のマークアップ

```
<quote type="basetext" xml:id="A01" corresp="B01" >
<w lemma="assosi" xml:id="A01-1">Assosi</w>
<w lemma="kho" xml:id="A01-2" >kho</w>
  <w lemma="veraṅja" xml:id="A01-3">veraṅjo</w>
  <w lemma="brāhmaṇa" xml:id="A01-4">brāhmaṇo</w>
</quote>
<note target="#A01">ti
<note target="#A01-1">assosī ti . . . </note>
  <note target="#A01-2">Kho ti padapūraṇamatte . . . </note>
  <note target="#A01-3">Veraṅjāyaṃ jāto . . . </note>
  <note target="#A01-4">Brahmaṇaṇaṭṭī . . . </note>
</note>
```

註釈対象が語ではなく句である場合には、<w>ではなく<phr>を用いて、見出しを<orig>というタグで括る方法を採用した。以下にマークアップ例を示す。

図 2 註釈対象句のマークアップ

```

<quote type="basetext" xml:id="A02" corresp="B02">
  <phr>
    <choice>
      <reg>Ṭaṃ kho paṇā</reg>
      <orig>ṭaṃ kho paṇā</orig>
    </choice>
  </phr>
</quote>
<note type="bhasya" target="#A02">
  ti itthambhūtākhyānatthe . . . .
</note>

```

基本的に、以上の作業をテキスト全体について行い、それを抽出することで、註釈対象語句索引の作成が可能となる。このマークアップ方法については雑誌論文③にて論じたので、詳細はそちらを参照頂きたい。

本研究では、実際にこのマークアップ方法を用いて、『サマンタパーサーディカー』の冒頭部分についてタグ付けを行っていった。そして、その成果を用いて、学会発表③を行い、註釈対象語句を抽出するデモンストレーションを行った。なお、この予備的作業を通して、このマークアップが読み手の解釈・判断を要する極めて困難なものであることが判明した。しかし、註釈対照語句索引の存在は有益と思われるので、幅のある解釈・判断を行うことで、今後もマークアップ作業を継続し、将来的には索引を完成させたいと考えている。

(2) 諸版本対照を容易にするためのマークアップについて

『サマンタパーサーディカー』には、PTS 版（イギリス）、タイ版（タイ）、ビルマ版（ミャンマー）、SHB 版（スリランカ）という 4 つの版本がある。それらに定本として信頼できるものではなく、正確な解読のためには校合が不可欠である。そこで、本研究は校合テキストの作成を目的の一つに掲げ、PTS 版を底本として、各版本の異読をマークアップすることにした。そのために採用したタグ・セットは下記の通りである。

PTS版	底本
SHB版	<rdg wit="C"></rdg>
タイ版	<rdg wit="S"></rdg>
ビルマ版	<rdg wit="B"></rdg>

本研究では、校合作業の手始めとして、唯一デジタルテキストのない SHB 版を取り上げ、その異読を底本の PTS 版に入力することにした。現時点で終了した箇所は、「僧残」部分と「波逸提」部分の一部であり、今後も作業を継続し、まずは SHB 版の異読を全て回収する予定である。広く研究者と共有可能なものとするために、将来的にはインターネットでの公開を計画している。なお、雑誌論文①②、及び、学会発表①②は、この対照作業の成果であり、この対照テキストを用いて行った研究である。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計 5 件)

- ① 青野道彦「不受食学処 (Dantaponaśikkhāpada) に関する予備的研究—比丘に許される食物取得」、『印度学仏教学研究』(査読有) 67-1, 2018 年, pp. 459-464.
- ② 青野道彦「Vinayapīṭaka における “ropeti” の意味」、『韓国仏教学』(査読有) 87, 2018 年, pp. 211-243.
- ③ 青野道彦・永崎研宣・下田正弘「仏教文献における註釈構造の可視化に関する予備的研究—パーリ語仏教文献を事例として」、『研究報告人文科学とコンピュータ』(査読無) 2017-CH-114 no. 2, 2017 年, pp. 1-5.
- ④ 青野道彦「世人の非難を受けて制定された律規定—パーリ律比丘分別を参照して」、『仏光学报』(査読有) 新三巻第一期, 2017 年, pp. 87-106.
- ⑤ 青野道彦「日本仏教における受戒儀礼の変遷—戒統に注目して」、『大学院研究論集』(韓国・中央僧伽大学校) (査読有) 9, 2016 年, pp. 195-226.

[学会発表] (計 4 件)

- ① 青野道彦, 「不受食学処 (dantaponaśikkhāpada) の目的について」, 2018 年 9 月 2 日, 日本印度学仏教学会第 69 回学術大会 (東京・東洋大学) .

- ② Aono Michihiko, “The Relationship between Dantaponasikkhāpada and Its Introductory Story” (不受食学処と因縁譚の関係), 2017年8月19日, XVIIIth Congress of the International Association of Buddhist Studies (カナダ・トロント大学).
- ③ 青野道彦, 「仏教文献における註釈構造の可視化に関する予備的研究—パーリ語仏教文献を事例として」, 2017年5月6日, 情報処理学会第114回人文科学とコンピュータ研究会発表会 (京都・龍谷大学アバンティ響都ホール) .
- ④ 青野道彦, 「日本仏教における受戒儀礼の変遷」, 2016年10月22日, 中央僧伽大学校 2016年度大学院学術大会 (韓国・韓国仏教歴史文化記念館国際会議場 (ソウル)) .

〔図書〕 (計 0 件)

〔産業財産権〕

○出願状況 (計 0 件)

○取得状況 (計 0 件)

6. 研究組織

(1)研究協力者

研究協力者氏名：李 慈郎

ローマ字氏名：Lee Jarang

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。